

「探し求め続ける」

～あなたは普通になっていませんか？～

ルカ11：9～13

同志社大学の創立者である新島襄は『我が校の門をくぐりたる者は、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、実業家になるもよし、教育者になるもよし、文学者になるもよし、かつ少々角あるも可、奇骨あるも可、ただかの優柔不断にして安逸をむさぼり、いやしくも姑息の計を為すがごとき軟骨漢には決してならぬこと、これ予の切に望み、ひとえに願うところである』と語っています。意味が分かりますか？簡単に訳してみると『少々角があってもいい、風変わりで個性が強くていい、ただはっきりとした意志もなく楽をすることばかり考え、その場しのぎのことばかり考えているような信念のない人間には決してならないこと、これが私の強く願うことである』となります。これは今日本人が忘れてしていることです。正しい方向に進まなくてはいけないことは分かっているのですが、苦勞したくないので「まあいいか」とその場しのぎで逃げてしまうことが多いです。自分の悪い部分を直したいと思っていてもなかなかそれに取り組むことが出来ないのです。私たちは自分の存在理由を見失ってしまうと「右にならえ・何の意味もないことを意味があると信じて行動する・その行動も何故やっているのかも分からない」このような状態になってしまいます。「自分の隣の人がやっているからやる」「自分のまわりの人が考えているからやる」「あの人がこう言ったからやる」これを私たちは「普通」と言います。昔の人は「自分自身もしくはその家族が大きな責任や使命を持って生きたい・生きて欲しい」と思っていました。しかし今の人は「大きな責任や使命を持つのは大変だ・苦勞する・可哀相だ・のんびり・そこそこ・平凡に・普通に生きたい・生きて欲しい」と思っています。「誰かがやってくれるから自分はしなくていい」と夢が無くなり、自分のしている行動の理由や意味が分からなくなっているのです。そこで聖書は教えてくれます。(ルカ11:9～13)私たちは「普通」になっていませんか？私たちが生まれてきた本当の意味を知り、そして何のために生きているのかを知ることが私たちの生きる希望です。私たちはこの希望を探し求めて生きているのです。しかし「そこそこで・平凡で・普通で」と言いながら「もうそれは得られた」と満足した気になっているのが現状です。しかし聖書はこう語っています。(ルカ11:9～13)この箇所での「求める」には「求め続ける」と現在進行形で語られています。私たちに「求め続けなさい」「探し続けなさい」「たたき続けなさい」と語られているのです。私たちは願ったものが得られないとすぐに諦めてしまいます。目の前で起きている状況に流されてしまいます。そして諦めて逃げてしまいます。しかも自分の願ったものを隣の人が持っているのを見つくとその人を妬みます。この世にお互いを妬む人が多かつたらどうなるでしょう。私たちは愛され必要とされることを求めていますがお互いを妬むと愛されることも無く愛することもできません。私たちが求め続けなければいけないことは「私たちが生きる理由」です。その理由が見つければ隣の人が何を携えていようが関係ありません。妬むことも無くなります。逆に「その人に何があげられるだろうか」と考えることができるようになります。しかし自分がそのようにされないとはできません。自分が愛されたことのない人が他人を愛することはできないし、自分を大事にされたことのない人が他人を大事にすることはできません。教会は宗教をするところではありません。お互いに愛し合い大事にし合っていることを確認する場所です。自分が愛されて必要とされていることに気づく場所です。この世の宗教と呼ばれるものは何かを得るためにやっています。欲しいものがあってそれを得るためにお参りしています。しかし教会は違います。自分が何のために生まれ何のために生き何のために今があるのかを確かめる場所です。そして何のためなのかと言うのは「愛されるため」に生きているのです。いくつになっても誕生日を祝われるのは嬉しいです。愛していることを表されたからです。だから今度は自分が愛を表そう・流そうとします。いよいよアドベント（降誕祭）に入りました。イエスさまの誕生は何のためにあるのでしょうか？それはイエスさまが私たちを愛していること・人が愛し合うべきことを伝えるためです。その最初のお祝いがクリスマスです。だから私たちは祝うのです。しかし最近では「苦しむマス」です。「だれが私を誘ってくれるのか」などと不平不満ばかりです。「普通」が当たり前になると的はずし、道はずします。聖書では的はずすこと・道はずすことは罪だと言っています。弓矢を撃つとき手元ではちょっとのズレでも行き着く先では大きく的をはずしています。だからそのちょっとしたズレが罪だと言っているのです。ですから私たちはこのちょっとしたズレを直す方法を教会で考えます。お互いに直すべきところを裁き合うのではなくその人のことを想って愛をもって伝えてズレを直していくのです。収穫に感謝をしてクリスマスを迎えます。岡山に生まれたこと・平和に暮らしていること・今この場に集まることができたこと…。私たちは日々の生活で素晴らしいものを収穫しています。しかし私たちはこの感謝のことをすっかり忘れてしまってまた新しい年を迎えようとしています。それで良いのでしょうか？だからこのクリスマスに神さまに「ありがとう」を言わなければならないし、受けた愛を流し、愛し愛されることを確認しなければいけません。私たちは「普通」と言う比較をやめなければいけません。「普通だ」と言いながら隣人と比較して満足したつもりになる…そうすると自分より良い環境の人が現れるとその人のことを妬んでしまいます。愛とは真逆の行動をとってしまいます。だから私たちは「普通だから」と言って満足してはいけません。私たちはいつも求め続け、探し続け、たたき続けなければいけません。私たちが得たいと願っているものは得られるまで願ひ続けなければなりません。そしてそれが得られたら終わりではありません。それを何のために使い、何のために用いるのかを考えなければなりません。聖書にはこう書かれています(ヤコブ4:1～3)。私たちが求め続け、探し続け、たたき続ける時にしなければいけないことは「普通」と言う思いで願わないことです。「人がやってるから」ではなく「何のために」を探し続けなければ私たちは自分の存在理由を見失います。しかしこの探し続ける理由に「自分が豊かになるため」があってはダメです。新島襄は語っています。風変わりな個性が強くていい、ただはっきりとした意志もなく楽をすることばかり考え、その場しのぎのことばかり考えているような信念のない人間には決してならないこと、そのために努力して絶えず目標のために進む…そうする理由は(ヤコブ1:6～12)です。私たちが何のために生きるのか…それは私たちが素晴らしいのちの冠を得るためです。「いのちの冠」とは「私たちが何のために生きるのかを知ること」です。この世で王となる人は権力者ではありません。自らがその国民(隣人)を愛し、その国民(隣人)を正しい方向に導く…だから自分が何のために存在するのかが分かるのです。聖書の中にも素晴らしい知恵をもった王としてダビデやソロモンが存在します。彼らがイスラエルの民の正しい王であると言われた理由は「自分が何のために王になるのか」を知っていたからです。その国の民を養い、正しい方向に導くリーダーになると知っていたのです。私たちが王です。豊か・金持ちだから王なのではありません。貧しくて王です。なぜかという「自分が何のために生きるか」を知っているからです。ですからこれからは目の前の状況に右往左往される人生ではなく、多くの人の前に立って正しく導く人であるべきです。そしてその導く人であるためには「自分が何のために生き、何のために存在するのか」を理解しなければなりません。私たちがなぜそのようなことができるのかと言えば、まず、私たちが愛してくださった方がおられるからです。イエスさまは私たちの全ての罪と重荷を背負うために約2000年前のクリスマスに生まれます。イエスさまの人生は人々を導き、その人の罪過を背負うものでした。イエスさまはひとりのサマリア人の女性を救いました(ヨハネ4:4～42)。彼女は初めて自分を愛してくれる人を知ったのです。そしてその愛をもって他の人々にイエスさまのことを伝えに行きました。そしてサマリア人全員がイエスさまの愛を知ったのです。イエスさまは私たちの罪と重荷を背負うために十字架にかかられました。肉がえぐれるほど鞭で打たれたのは、私たちがいつも隣人を鞭で打ちつけているように傷つけている罪を私たちに変わり背負うためでした。両手を杭で打ちつけられたのは私たちが自分の罪を顧みず人のことばかり指さして責めるその汚い罪を私たちに変わり背負うためでした。両足を杭で打ちつけられたのは私たちが自己中心な考えにより神さまの正しい道に進まず欲に負けた間違った道に進んでしまう罪を背負うためでした。このクリスマスの時、本当の愛を命がけの愛を示したくださった方がおられることを思い起こさなければいけません。そして「普通だ」と言いながら隣人と比較して満足したつもりになり、自分より良い環境の人が現れるとその人のことを妬んで、愛とは真逆の行動をとってしまうのではなく、その受けた愛からお互いに愛し合い大事にし合っていくましよう。(要約者:行司佳世)